大学史研究会事務局

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1
大阪外国語大学外国語学部　進藤　修一研究室内　大学史研究会
TEL /FAX 0727-30-5355　EMAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

大学史研究会事務局員（五十音順）

阿曽沼　明裕　（名古屋大学）　大川　一毅　（早稲田大学）
進藤　修一　（大阪外国語大学）　橋本　鉱市　（東北大学）
福石　賢一　（九州女子大学）　吉村　日出東（明治大学）

大　学　史　研　究　通　信
第31号、2002年7月31日（水）
大学史研究会

第31号の内容：新入会員・会員ニュース・大学史研究情報・大学文書館ニュース・事務局からのお知らせ・編集委員会からのお知らせ・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

新入会員

片桐　良朋　会員
　所属：エジンバラ大学大学院
　専門：イギリス教育史

会員ニュース

［所属変更］
村越　純子　会員
新所属：埼玉県立大学短期大学部　非常勤講師

大学文書館ニュース（1）

ハーバード大学教育学大学院特別コレクション

坂　本　辰　朗（創価大学）

去る4月より、在外研究のためにハーバード大学に滞在しています。訪問研究員として、前回、この地で一年を過ごしたのは、もはや10数年以前のことですが、以降、ほぼ毎年一回は研究のために足を運んでいますので、懐かしいという気持はありません。ただし、今回、ハーバード大学教育大学院のガットマン図書館の地階に新装オープンとなった、特別コレクションのことを思いますと、以下に述べますように、このコレクションがついに安住の地をえることになったこともあり、また、この間のことが自身の研究歴とも重なることもあり、感慨もひとしおです。

もはや20年近くが経ちますが、ハーバード大学の中央図書館であるワイドナー記念図書館の書庫の一つに初めて足を踏み入れた日のことは忘れられません。そこはまさに宝の山で、全米各地の大学の学長年次報告や大学が出版した多様なモノグラフ、各種式典の記録出版物、さらに、初等中等学校の年報やカタログから、19世紀から20世紀にかけて小学校から大学に至るまでのアメリカ合衆

国で使用された教科書の膨大なコレクションが、自由に手に取ることができるように並んでいたのです。熱に浮かされたように、広大な書庫の中をさまよい歩いたことをいまだに、昨日のことのように記憶しています。

むろん、これらはマニュスクリプトではありませんが、研究を進めるにあたり、そこに至る前の段階で、ひとつの大学だけでなく、アメリカ合衆国の主要大学をすべて網羅し、さらに、大学だけでなく、すべての教育段階に至る、他所では入手不可能な一次史料が一カ所に集約され、自由に手に取ることができる——貸し出しや書庫外に持ち出して自身でコピーが可能——ということが、どれほど希有な機会であるのか、恐らく当時の私自身、よく分かっていなかったのではないかと思われます。

ハーバード大学ワイドナー記念図書館が、どうして、これだけの史料を収集することができたのか。それはやはり、ハーバードという特殊な大学であったからというしかありません。つまり、全米の大学や学校は、まさにハーバード大学であるからこそ、さまざまな出版物をこぞって寄贈したのであろうし、これを受け取ったハーバード大学は、実に丹念に——大学記念式典の午餐のメニューに至るまで——史料を保存したということでしょう。

しかし、このような至福の時間はさほど長続きはしませんでした。天文学的な量とスピードで増え続ける資料をどのように収容すればよいのか——これは、ハーバード大学でも検討課題になったわけです。その結果は、歴史研究者にとってはある意味で、きわめて困ったことになりました。

まず、収集した膨大な史料は大きく、いわゆる大学とそれ以外の機関に二分され、大学関係については、デポジット・ライブラリー（学外の保存書庫）へ保管、大学以外の機関については、教育学大学院の付属図書館であるガットマン図書館の最上階の書架に移動ということになりました。むろん、デポジット・ライブラリー保管図書は、請求すれば次の日に取り寄せが可能であり、さらに、教育学大学院図書館に行けば、移管された史料は自由に手にとって見られたわけです。しかし、私のように、伝統的な大学の領域に属さない高等教育の境界部分を研究対象にする者にとっては、この分割は、決定的に不利な条件となってしまいました。おまけに、ガットマン図書館の最上階の書架は、ある意味でまったく無防備で、こんな所に貴重な史料を“保管”しておいて大丈夫なのか、と心配せざるをえない状態でした。

その後、この最上階の書架は、金網のフェンスで覆われ、入場には許可がいるように改められました。むろん、収蔵史料を勝手に持ち出したり、コピーを取ることはできなくなり、これは史料の保管という意味では結構なことでした。私も、5年以上にわたって、この通称“鳥かご”の中に入って、史料を閲覧したりノートを取ったりした想い出があります。しかし、収蔵されている史料の貴

原稿募集

『大学史研究通信』第32号は2002年9月30日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿提出・お問い合わせ等は『通信』編集担当の進藤までお願いいたします。連絡先は最終ページをご覧ください。

住所・所属変更届のお願い

住所や所属（昇任・学位取得も含む）に変更のある会員は『通信』編集担当進藤までご一報くださるようお願いいたします。教授・研究のために海外にご滞在予定のかたも、海外での連絡先をお教えいただけましたら幸いです。ご連絡は最終ページにございます、進藤研究室宛にお願いいたします。

『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80円×部数＋郵送料（1部の場合90円、2部以上は120円）分の切手を同封の上、編集担当進藤宛までご請求下さい。ご連絡は最終ページをご覧ください。

編集後記

6月には紀要の編集委員会も正式に発足し、いよいよ新体制が軌道にのってきたように思います。寄稿される情報も増えました。「手応え」が得られれば、編集者にも熱が入ります。このようにして、『通信』がこれからの大学史研究の発展にますます寄与できる存在であり続けてほしいと願っています。

（進藤修一記）

『通信』編集は事務局・進藤修一が担当しております。
連絡先〒562-8558　大阪外国語大学外国語学部　進藤　修一研究室内
TEL/FAX 0727-30-5355
EMAIL　sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp
sshindo@jnb.odn.ne.jp

『大学史研究通信』第32号は、9月30日発行予定です。

2. 現在募集中の「大学史研究」執筆申し込み者の原稿は、１９号に掲載する。
　１９号は、２００３年３月２０日までに発行する。

3. 編集委員長は、別府昭郎会員（明治大学）とする。

4. 原稿の送付先は、事務局の吉村日出東会員とする。
（E-Mail:YHY13334@nifty.ne.jp）

なお、前回の「通信」３０号で、折田会員の名前が哲郎になっていました。正しくは「悦郎」です。おわびして、訂正いたします。

（文責：別府昭郎）

『大学史研究』原稿送付について事務局よりの補足

『大学史研究通信』２９号にて、『大学史研究』１９号の原稿送付先を、事務局進藤修一宛としておりました。その時点ではまだ編集委員会が正式に発足していなかったことによる措置でしたが、上記別府編集委員長の説明にあるとおり、事務局から吉村会員が紀要担当者として編集委員会との業務に携わることが決定されましたので、**原稿送付は吉村会員へお願いいたします**。連絡先は以下の通りです。

東京都千代田区神田駿河台１―１
明治大学資格課程事務室気付
大学史研究会編集委員会宛

（事務局：進藤　修一）

重さからいえば、いかにもみすぼらしい保管場所で、自身、何となく、紙くずの山の中で作業しているような気分になったのはやむをえないことでした。

それがこの 4 月にようやく、ガットマン図書館の地階に、専用の書庫と閲覧室をもつようになったのです。真新しい閲覧室の机にはすべて、閲覧者のコンピュータ持ち込みを前提に、大学の高速 LAN の情報コンセントが備えられています。たんにインターネットが利用できるだけでなく、ハーバードの ID を持つ者にとってはここから、大学が契約する数百種類のデータベースに入ることができますので、閲覧史料に少しでも不明な点（たとえば、特定の人物の生没年）が出てきたら、即座にオンラインで調査が可能（大学の蔵書目録を参照できることは言うまでもありません）になりました。“鳥かご”時代から見ればまさに雲泥の差です。

今回、新装なった特別コレクションに収蔵されたのは、歴史的教科書コレクション（EducT Collection）と学校レポート・コレクション（EducR Collection）です。歴史的教科書コレクションについては、そのすべてがマイクロフィルム化されており、これはガットマン図書館の通常の閲覧室でも見ることができますが、19 世紀をつうじて、アメリカ合衆国のすべての生徒・学生がそれを通して学習したという約 35,000 冊の教科書の現物――デイ、プレイフェア、ウェイランド、シルマンなど、日本でもおなじみのカレッジ教科書が枚挙にいとまがありません――を手に取ってみることができるのは（登録さえ認められれば、電動書架が並ぶスタックに入って自分で閲覧室に持ち出すことができます）ありがたいことです。さらに、学校レポートの方は、創立時点で四年制大学ではなかった、全米の私立・公立学校のさまざまな出版物（年次要覧から記念年史まで）が並んでいます。私のように、ジェンダーと高等教育に関心がある者にとっては、従来の大学史史料の蒐集範囲からは漏れてしまう部分をカバーしているという意味で貴重です。世界中どこでもそうでしょうが、女性の高等教育機関は圧倒的多数が、最初は中等教育機関（教師養成のセミナリーやアカデミーなど）として出発し、それが短期大学（ジュニア・カレッジ）に発展し、ついには四年制大学になるというのが一つのパターンです。むろん、そこまで発展しえた学校は実はごく少数で、多くが歴史の中に消えていったわけです。私たちはともすれば、大学として残った機関の歴史のみを見て高等教育を語ってしまうわけですが、書架に並ぶ膨大な史料を見てゆけば、もう一つの歴史すら可能なのではないかと思われます。つい二年前に、アメリカ合衆国高等教育界にとって久々の“大型倒産”として報じられたブラッドフォード・カレッジ（マサチューセッツ州）の閉校のニュースを聞いて私が最初に思い起こしたのも、この特別コレクションのことでした。ブラッドフォードは、実は、上記の女性高等教育史発展パターンの典型の一つで、女性のためのブラッドフォード・ア

カデミーとして出発し、それが女性のジュニア・カレッジとなり、さらにこれが四年制の共学大学となったわけで、一時期は全米でもっとも革新的なカリキュラムを掲げた大学として注目を集めました。今回、この特別コレクションのスタックに入ると、書架には、ジュニア・カレッジ時代を中心に、この学校の出版物が丹念に保存されていました。125 周年記念式典のために、1928 年 6 月 9 日（土）の午後二時半から上演されたという劇の脚本を手に取りつつ、私は、倒産したあのカレッジ所有の関係文書は焼却や散逸されることなく、果たして無事に保管されるのだろうか、それとも、もはやこのハーバード大学図書館の地下に残った記録のみが、このカレッジの歴史を証言する唯一のものになってしまうのだろうかと、想いをめぐらしました。

大学文書館ニュース（2）

「オーストリアの大学アルヒーフとヴィーン大学アルヒーフ」

早島　瑛　（関西学院大学）

ハプスブルク王朝が 1365 年に設立したヴィーン大学は周知のように（プラハ大学を別とすれば）ドイツ言語文化諸国で最古の大学である。現在の大学本館の竣工は 1884 年であった。一国を代表する大学だけに著名な研究者を輩出し、さまざまな分野で「ヴィーン学派」(Wiener Schule)が生まれ、動物学のローレンツや経済学のハイエクはノーベル賞を受賞した。フロイトも 1919 年から 1934 年まではヴィーン大学の正教授であった。ヴィーン大学、換言すればオーストリアで最初に教授資格試験に合格して私講師になった女性がエリーゼ・リヒター(Elise Richter 1865-1943)である。リヒターは 1921 年に「員外教授の称号」を得た。しかし、ロマニスティークの研究分野で国際的に評価が高かったにもかかわらず正教授職に招聘されることなく 1942 年、人種的な理由でテレージエンシュタット強制収容所に送られた。オーストリアがドイツに併合されたのは 1938 年 3 月のことであるが、それ以前からヴィーン大学では教授と学生が深く褐色に染まっていた。ナチスの時代、ヴィーン大学では人種的・政治的理由から教授と講師の 45 パーセントが失職している。

女性の大学入学に関してはプロイセンとオーストリアが最も保守的であったが、オーストリアでは 1897 年にヴィーン大学哲学部で最初の女性が記録されている。最初、女性の学生数は微々たるものであった。しかし、1920 年代になると女性は全学生の 2 割から 3 割に達した。さらに第二次世界大戦後の 1970 年代には 4 割を超え、現在ではヴィーン大学の全学生の半数以上が女性である。なおヴィーン大学は 1975 年まで 5 学部制をとっていたが、このとき、法・国家学

紀要編集委員会からのおしらせ

第１回編集委員会が、２００２年６月２２日１４時から、明治大学研究棟第３会議室で開催されました。

出席者は、前号の「大学史研究通信」３０号でお知らせしました編集委員の全員でした。堀内達夫（大阪市立大学）、渡辺かよ子（愛知淑徳大学）、折田悦郎（九州大学）、別府昭郎（明治大学）の４名です。事務局から、紀要担当の吉村日出東が、記録のために出席しました。

主要な議題は、

（１）次号以降の『大学史研究』の発行について
（２）編集委員会の役割について
（３）編集委員会の任期について
（４）編集委員会委員長の選任について

でした。

議論の結果、以下の簡単な「申し合わせ」をしました。

1．紀要「大学史研究」を編集するため、「編集委員会」をおく。
2．委員の数は、５ないし６名程度とする。
3．編集委員会は、紀要「大学史研究」の編集・発行について、全ての責任をおう。
4．編集委員会の任期は２年とし、再任を妨げない。
5．委員長の選任は、委員の互選による。
6．編集委員会の委員に交代の必要が生じたばあいには、現任委員が後任委員を推薦し、総会で決定する。

「申し会わせ」の内容は以上です。

これに基づき、次の事項を決めました。

1．紀要「大学史研究」１８号は、本会の創設者の一人故横尾壮英会員の追悼号とする。執筆については、故横尾壮英会員をよく知る会員にお願いする。自主的な投稿も歓迎する。

２００１年度会計報告について

大学史研究会会計報告

2001年11月23日に広島大学学士会館で開催された大学史研究会総会において、
2001年度会計報告、及び2002年度会計予算案が下記の通り承認されましたことを・

大学史研究会　事務局　会計（担当責任　大川一毅）

2001年度　会計報告

自2000.11.24　～　至2001.11.22

収入　　支出

科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	2,835,322	通信・印刷費	12,810
`00セミナー準備金償還	17,033	「大学史研究通信」編集・発送費	149,286
年会費・入会金	692,760	「大学史研究 」編集・発送費	310,240
「大学史研究」売上金	27,500	諸雑費（消耗品・送金手数料等）	13,085
利息	2,350	`01 セミナー開催準備金	200,000
		`01セミナー海外研究者招聘費	500,000
		次年度繰越金	2,389,544
計	3,574,965	計	3,574,965

上記資産（繰越金に含まれる）には以下の指定金銭信託金を含む
1994年1月13日　三井信託銀行へ￥500,000.の指定金銭信託（ヒット）契約（200
1997年4月14日　三井信託銀行へ￥500,000.の指定金銭信託（ヒット）契約（200
［上記、金銭信託（現：中央三井信託銀行）　2001年9月26日現在総残高　￥1,020,652.］
★「大学史研究通信」「大学史研究」の『編集費』とは「編集印刷費、通信費、

2002年度　会計予算案

自2001.11.23　～　至2002. 総会開催前日（予定）

収入　　支出

科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	2,389,544	通信・印刷費	15,000
`01セミナー準備金償	100,000	「大学史研究通信」編集・発	150,000
年会費・入会金	650,000	「大学史研究 」編集・発送費	320,000
「大学史研究」売上金	40,000	謝金	50,000
利息	2,000	諸雑費（消耗品・送金手数料	15,000
		`02 セミナー・例会開催準備	150,000
		次年度繰越金	2,481,544
計	3,181,544	計	3,181,544

なお、総会席上において、上記の予算案に加え、
事務局会議費、並びに編集委員会会議費（それぞれの会議に関わる遠距離交通費・
及び2001年度広島大学セミナーにおける記録誌編集発行経費を予算案として計上・

部が法学部と社会経済学部に分かれ、哲学部が解体して精神科学、自然科学、総合科学の３学部が生まれた。

わが国でもヴィーン大学の近代と現代の歴史はもっと研究されてよいと思われる。（中世については平野一郎『中世末期ドイツ大学成立史研究』第２章参照。）大学のアルヒーフは大学史の研究で国際的に著名なミュールベルガー博士(Hofrat Dr. Kurt Mühlberger)が館長職にあり、研究環境も悪くない。同館長の研究分野の一つにナチス時代のヴィーン大学の歴史があり、『史料集・知識人の追放』(*Dokumentation: Vertriebene Intelligenz 1938. Der Verlust geistiger und menschlicher Potenz an der Universität Wien von 1938 bis 1945, Wien, 2. Auflage 1993*)は1993年に第２版が出版されている。

ヴィーン大学アルヒーフはヴィーンのシンボルとして知られているシュテファンス・ドームから徒歩５分、ポスト・ガッセ９番地にあり、通りの名称が示すように中央郵便局のすぐ南に位置する。交通の便はすこぶる良い。大学アルヒーフの住所表記は次の通り。Universitätsarchiv: Alte Universität, Postgasse 9, 1010 Wien.

オーストリアの文書館は、わが国ではドイツの文書館ほどは知られていないが、中央・地方を問わず、ドイツと同じようによく整備され、研究者には好都合である。オーストリアは連邦国家であるから、国立文書館は「ブンデス・アルヒーフ」と「ランデス・アルヒーフ」に分かれ、前者は「オーストリア国立文書館」(Österreichisches Staatsarchiv)、後者はブルゲンラント、ケルンテン、下部オーストリア、上部オーストリア、ザルツブルク、シュタイエルマルク、チロル、フォア・アルルベルクの８州の首都に設置された「州立文書館」(Landesarchiv)である。たとえば『大学史研究』第14号で紹介した『ザンクトガレン大学百年史』の執筆者ブァマイスター教授は「フォア・アルルベルク州立文書館」（ブレゲンツ）の館長である。

こうした国立文書館と同様よく整備されているのが各都市の市立文書館、教会アルヒーフ、大学アルヒーフである。このうち大学アルヒーフを大学の創設順に挙げれば次のようになる。(＊ 印は創設準備中もしくはアルヒーフなし。)

１）ヴィーン大学	創設 1365	アルヒーフ創設 1386/1708
２）グラーツ大学	1585	1966
３）ザルツブルク大学	1622/1964	1974
４）インスブルック大学	1669	1967
５）ヴィーン獣医科大学	1767/1896	＊
６）ヴィーン工科大学	1815	1977
７）グラーツ工科大学	1849	＊

8）	ヴィーン美術大学	1867	1978
9）	ヴィーン農林科大学	1872	*
10）	ヴィーン経済大学	1898	*
11）	ヴィーン音楽大学	1909	1993
12）	リンツ大学	1966	1998
13）	クラーゲンフルト大学	1970	1997

これらの大学アルヒーフのなかで、大学の歴史、規模、人員の側面で最も重要なのがヴィーン大学アルヒーフである。スタッフは館長ミュールベルガー博士を含め合計７名。ドイツの重要な大学アルヒーフに『大学史研究通信』第 29 号で紹介したベルリンはフンボルト大学のアルヒーフがあるが、ここのスタッフも館長のシュルツェ博士を含めて７名であるから同じ規模ということになる。大学史研究会の会員が今後オーストリアの大学史に積極的に取り組むことを期待したい。

大学史研究情報

著書紹介 『大学とはなにか―九州大学に学ぶ人々へ―』

折田 悦郎（九州大学大学史料室）

本年３月末、九州大学大学史料室が中心となって編集した『大学とはなにか―九州大学に学ぶ人々へ―』が刊行された。国立大学では初の低年次における大学論の授業である「大学とは何か―ともに考える―」（総合科目）の講義録をもとにしたもので、執筆者は九州大学の文系、理系の教官団 11 名。大学、殊に九州大学で学ぼうとする人たちに、大学で学び研究することの意味を伝えようとしたものである。今回は本書についての紹介をしてみたい（下に目次を掲載する）。

刊行によせて　梶山千里（総長）
はじめに　新谷恭明・折田悦郎（大学史料室）
第１章　大学の歴史　吉岡斉（大学院比較社会文化研究院）
第２章　国際的視点からみた日本の大学　同上
第３章　帝国大学の歴史的役割と九州帝国大学の創設
　　折田悦郎（大学史料室）
第４章　帝国大学の歴史的役割と九州大学
　　―大学と産業界のつながり―　森祐行（大学院工学研究院）

学生だけではなく、教職員にとってもアイデンティティ確認のための材料になるとともに、さらには高校生・予備校生等、（九州）大学を目指す人たちにも役立つことを希望して筆を擱きたい。

大学とはなにか―九州大学に学ぶ人々へ―
新谷恭明・折田悦郎共編
海鳥社（福岡市中央区大手門３･６･13）
Ａ５判 256 頁（2002.３刊）
1800 円＋税

（おりた・えつろう　九州大学）

事務局からのお知らせ

２００２年度「大学史研究セミナー」開催について（再掲）

２００２年度大学史研究セミナーは、以下の日程にて実施することを事務局にて確認いたしましたので、会員諸氏にご報告いたします。

日程：　１１月１６（土）、１７日（日）
会場：　明治大学（東京都）

開催校の明治大学からの提案により、「横尾会員の大学史研究に関する業績の学問的検討を考慮する」企画を準備しています。また、自由報告を募集いたします。報告希望者は８月末日までに福石賢一事務局員までお知らせ下さい。連絡先は以下の通りです。

807-8586　北九州市八幡西区自由が丘 1-1
九州女子大学文学部　人間文化学科　福石　賢一　宛

Tel.093-693-3335（直通）
Fax.093-693-3361（学科共通）
E-Mail: fukuishi@kwuc.ac.jp

（進藤修一記）

講義内容については、前半部分を大学史を軸とした歴史的内容にあて、後半部分は大学の自治、学際化、情報化、国際交流、入試制度、大学と地域社会、留学生など、現在大学が直面している問題を素材として採り上げた。歴史を重視したのは、大学も歴史の中で形成されてきたという複雑な性質をもっており、これを見ることなしにはその特徴を言い表すことができないと考えたからである。

授業の形式は通常の講義形式だけではなく、特別講義やシンポジウムの形も採った。毎年前学期の最終日には総長による「九州大学の現状と将来」という特別講義を行ったが、これは学生たちには大変良い刺激になったようである。また 1999 年（平成 11）度の後学期には、大学史料室長新谷恭明教授をコーディネーターに、寺崎昌男（桜美林大学大学院教授）「大学における低年次教育の意味するもの」、押川元重「九州大学の低年次教育の現況」、折田悦郎「試行授業を行って」を内容とする、シンポジウム「大学における低年次教育の意義―試行授業を行って―」も開催した。例えば寺崎教授の低年次教育に対する提言には、「来年もこのような試みが行われたら、是非参加したい」「低年次教育は、自己の発見のためであるという話に全く共感した」といった感想が寄せられた。

このような授業の成果・波及効果がどのようなものであったのか、即断することは難しい。しかし、一連の講義が若干なりとも、①アイデンティティの形成、②自信と誇り、③充実した大学生活、④歴史認識の形成、⑤関心の拡大、といった諸点を受講生に与え得たとするならば、所期の目的の大半は果たしたと考えていいのではないか、と思っている。

それはともかく、今回の講義や『大学とはなにか―九州大学に学ぶ人々へ―』の編纂には、常に九州大学大学史料室にある史料・情報を活用した。大学におけるアーカイブセクションの役割には、歴史を始めとした研究上の有用性、教育機能、アカウンタビリティやアイデンティティのための機関等、いくつかの点が挙げられている。今回の試みもアーカイブセクションの蓄積を教育に還元すること、そしてその教育活動自体が大学の自己確認やアカウンタビリティのための基礎作業になることを示そうとしたものであったが、自校を始めとする大学関係史料を収集し、そこで組み立てられた成果をもとに学内外のコーディネートを行う組織といえば、今のところはアーカイブセクションしか考えられない。今回の試みで、大学の事務文書を収集し、大学の歴史や組織について研究するアーカイブセクション（大学史料室）の果たす役割が極めて重要であるということを再確認することができた。

なお、最初にも記したように、本書は「大学とは何か―ともに考える―」の講義録をまとめるという形をとっている。しかし勿論それだけではなく、広く大学論・大学史の出版物となるように心がけたつもりである。本書が九州大学の

第５章　大学とキャンパス空間
　　福田晴虔（大学院人間環境学研究院）
第６章　私立大学及び専門学校の歴史的役割
　　新谷恭明（大学史料室・大学院人間環境学研究院）
第７章　日本における大学の自治　荻野喜弘（大学院経済学研究院）
第８章　学際化と大学　有馬學（大学院比較社会文化研究院）
第９章　地域社会と大学 ―九州大学の場合を主として―
　　東定宣昌（石炭研究資料センター）
第 10 章　情報化社会と大学　久米弘（大学院人間環境学研究院）
第 11 章　入学試験と大学　植田信廣（大学院法学研究院）
第 12 章　大学と留学生　白土悟（留学生センター）
付録１　九州大学組織図／付録２　九州大学教育研究組織／付録３　九州　大学関係年表／執筆者紹介

言うまでもなく、戦後教育改革から半世紀を経た現在の大学は、様々な問題を抱えている。例えば多くの国立大学では法人化を控え、教育、研究のあり方を見直す「大学改革」が盛んに討議されている。一方、大学がこのような変革を求められるなか、大学に学ぶ学生たち自身にも大きな変化が見られるようになった。なによりも大きいのは、学生自身のなかに自らが〈知〉の主役であるという自覚が欠落してきたことであろう。このような状況をどうすれば変えられるか？自らが学ぶ（九州）大学というものについて知るところから始めるべきであろう、と私たちは考えた。

九州大学では既に早くから、自校史教育である「九州大学の歴史」を大学史料室専任教官の筆者が開講していたが（1997 年度後学期から毎学期）、大学史料室の共同研究「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」が、九大の教育・研究支援制度である「九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト」に採用されて（1998 年度に採用、以後３年間継続）、本格的な共同作業が始まった第２年度（1999 年度）に、「大学とは何か―ともに考える―」（総合科目）の講義も始めたのである。これは「九州大学の歴史」も興味深いが、それ以外に「大学制度の成立」「大学の理念」等、よりグローバルな大学史・大学論を学びたいという学生たちからの要望に応えたものであった。「ともに考える」という副題を付した理由の一つもそこにあるが、これはまた教官の側にとっては九大が標榜するＣＯＥ（卓越した研究拠点）の原点を学問的に確かめる作業でもあった。この「大学とは何か―ともに考える―」は大変に人気のある科目であり、毎年前学期には 600 人近くの受講希望者を 300 人に人数制限せざるを得ないほどであった。